

ごあいさつ

「毒地社(どくちしゃ)」という名前を聞いたことがありますか？

この不思議な名前のグループが、山形で初めての公募による洋画展覧会を開催しました。今からおよそ90年前のことです。

大正11(1922)年、小塚義一郎(山形県師範学校図画教師)と為本自治雄(県立山形工業学校図画教師)の呼びかけで、今泉篤男(当時山形高等学校生)、奈良村正史、逸見誠一、石澤健吉(当時山形県師範学校生)の20代前半の若者たちが中心となって結成されたこのグループは、のちに一水会や日展で活躍する菅野矢一ら多くの芸術家が出品するなど、初期山形美術界の萌芽期を育んだという点で、大きな意義を持っていました。

平成19年の夏、山形大学の構内で数点の美術資料が発見されました。その中には為本や奈良村の作品が含まれていました。今ではほとんど耳にすることが無い、この若者たちの展覧会を、山形高等学校、山形師範学校の伝統を引き継ぐ山形大学でもう一度開催したいという想いでこの展覧会を企画いたしました。

また、同じく大正10年、新築間もない山形高等学校をおそらくは飾ったであろう、満谷国四郎の油彩画も同時にご紹介します。既に日本洋画界の大家であった満谷の作品は、毒地社のメンバーたちも大きな関心をもって目にしたことでしょう。

この展覧会で山形近代洋画の歴史の一頁を感じて頂けたら幸いです。最後となりますが、貴重な作品の展示をご快諾頂いた皆さま、そして本展開催のためご協力頂いた皆さまにこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2009年11月
山形大学附属博物館

山形近代美術の中における毒地社

山形の近代美術の歴史において、ほぼ最初に名前が挙がるのが明治43年の「木葉会」、そして大正に入ってからその後を継いだ「ヤツデクラブ」というグループである。特に後者は、千歳公園内薬師堂を会場にした展覧会を開催し、石井柏亭や藤島武二などの中央画壇からも作品を将来した。これが事実上、山形市近辺における洋画展の最初となる。

大正4年になると、より本格的な美術展覧会が開催される。それが「望郷会」展である。彫刻家新海竹太郎や石川確治、日本画の湯原柳畝、菊池華秋、松田修平ら在京の美術家らに限られてはいたが、ここでもやはり満谷国四郎ら大家の作品が参考として展示され、在郷の作家たちに刺激を与えた。

そのような新しい美術への高まりの中で生まれたのが「毒地社」である。大正11年、山形師範学校に赴任した東京美術学校出身の小塚義一郎と、同じように県立山形工業学校の図画教師となった京都高等工芸学校を卒業したばかりの為本自治雄が出会い、この地域における初めての公募洋画展を開催しようと意気投合した。小塚の元に出入りしていた奈良村正史、当時開設されたばかりの山形高等学校で文芸活動をしていた今泉篤男、山形中学出身の逸見誠一、師範学校生の石澤健吉の6名が中心となり結社されたグループがこの「毒地社」なのである。この新しい試みは山形市民に熱烈な歓迎をもって受け入れられた。期待が高まる中、第1回の応募作品は200点に達し、69点の入選作が大正11年9月30日から10月2日まで山形市役所2階にて展示された。評判は上々で、会員券の増刷をするほどであったという。

山形美術運動の先輩である服部午山や、歌人結城哀草果、詩人眞壁仁ら文化人の精神的支援も大きかったというが、大正という時代、山形における初めての高等学校の創立（大正9年）、各学校の図画教育による美術の一般化、中央画壇における県出身者の活躍、マスメディアの報道による新しい文化への気運が山形でも高まっていたことの現れだろう。

米沢のグループ「光原社」とも積極的に交流し、椿貞雄ら在京の画家からも出品を受けるなど非常に活発な活動を続けていたが、その一方でこの「毒地社」は20代前半の若者たちが中心となっていたことから、ある定まった方向性をもっていた訳ではなかった。後に美術界で活躍する寺崎善弥、牧野柿五郎、菅野矢一らのみならず、新聞記者の高島米吉、経済界では田口連三といった様々な分野で活躍する人材がここから巣立っていった。そして大正14年には岸田劉生や椿らに影響を受けた為本、奈良村らによる「北秋会」の結成、昭和3年には美術教師を中心に小塚、逸見らによる「向陽会」の結成によって事実上、「毒地社」の活動は幕を下ろすことになる。

しかし、ここで切磋琢磨した若者たちの多くは、後に東京の団体展で活躍し、また山形県美術家協会（今日の県美術連盟）発足に関わることになる。山形近代文化の育成の基盤であったという点からも、毒地社の名前は忘れ去られてはならない。